

# 同志社大学

## 2020 年度卒業論文

論題 女子大学生のライフコース観・キャリア意識に与える母親の影響

社会学部社会学科

学籍番号：1109171058

氏名：小川 はるか

指導教員：立木 茂雄

(本文総文字数：25663 字)

## 要旨

論題：女子大学生のライフコース観・キャリア意識に与える母親の影響

学籍番号：1109171058

氏名：小川 はるか

本稿の目的は、母親の態度が女子大学生のライフコース観やキャリア意識に影響を及ぼすのか、また母と娘の関係が親密的であるほどその傾向は顕著であるのかを検討することである。そこで、女子大学生を対象にWEB調査を行い、統計ソフトSPSSにて分析を行った。結果、以下のことが明らかになった。家庭を優先すべきと考える母親を持つ娘は、家庭志向なライフコースを選択し、ライフスタイル重視のキャリア意識を持つことが示された。また、経済的自立を促す母親を持つ娘は、職業志向なキャリア意識を持つことが分かった。しかし、自立性を尊重する母親を持つ娘は、就業継続を現実的に想定しない傾向にあるなど予想とは異なる結果が見られた。母娘の親密度によって影響の差異が見られるかを検討するため、親密度の下位概念である「母親への肯定的感情」、「母親の支配的態度」、「母親への服従的態度」の高低による比較を行った。その結果、「母親への肯定的感情」と「母親への服従的態度」の得点が高い群では、娘が親の影響を受けやすくなるという結果が一部確認できた。しかし、「母親の支配的態度」では、上記のような結果は見られなかった。

キーワード：母娘関係、女子大学生のライフコース観・キャリア意識、性別役割分業意識

## 目次

<b>1 はじめに</b> .....	<b>1</b>
1.1 研究の背景 .....	1
1.2 先行研究 .....	1
1.2.1 性別役割に関する研究 .....	1
1.2.2 青年期における親子関係の研究 .....	2
1.2.3 青年期の就業選択に関する研究 .....	3
1.2.4 家族システム研究 .....	4
1.3 本稿の目的と意義 .....	5
<b>2 方法</b> .....	<b>5</b>
2.1 調査方法 .....	5
2.2 調査項目 .....	5
(1) 分析に用いる従属変数 .....	6
(2) 分析に用いる独立変数 .....	7
(3) 属性等に関する項目 .....	10
2.3 分析方法 .....	11
<b>3 調査結果</b> .....	<b>11</b>
3.1 度数分布 .....	11
(1) 回答者の属性 .....	11
(2) 女子大学生のライフコース観 .....	12
3.2 重回帰分析 .....	13
3.2.1 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因 .....	13
(1) ライフコース観を従属変数とした重回帰分析 .....	13
(2) キャリア意識を従属変数とした重回帰分析 .....	20
3.2.2 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較 .....	22
(1) 母親への肯定的感情 .....	23
(2) 母親の支配的態度 .....	24
(3) 母親への服従的態度 .....	26
<b>4 考察</b> .....	<b>28</b>
4.1 度数分布 .....	28
4.2 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因 .....	28
(1) ライフコース観 .....	28
(2) キャリア意識 .....	30
(3) 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因まとめ .....	30
4.3 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較 .....	30
(1) 母親への肯定的感情 .....	30
(2) 母親の支配的態度 .....	31
(3) 母親への服従的態度 .....	31
(4) 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較まとめ .....	32
<b>5 結論</b> .....	<b>32</b>

# 1 はじめに

## 1.1 研究の背景

現代の日本では、「女性の活躍推進」、「女性が輝く社会」など、職場における女性の活躍を推し進めている。2019年には、女性活躍推進法などの一部を改正する法律が成立し、女性活躍に関する情報の強化や特例認定制度（プラチナえるぼし）の創設などが加えられた（厚生労働省，2019）。制度としては、職場における男女平等を目指す動きが見られることが伺える。

一方、世界経済フォーラムが2019年に発表した「The Global Gender Gap Report（ジェンダー・ギャップ指数）」（男女平等を示す指数）によると、日本の順位は153カ国中121位で、2018年の110位から後退した（内閣府，2020）。特に、経済と政治の分野のスコアが著しく低い結果だった（内閣府，2020）。このような低い順位をみると、現状の日本社会では、職場において男女平等であるとは言い切れない。

社会に出る前の大学生は、将来の働き方に対してどのように考えているのだろうか。マイナビ（2020）の「2021年卒大学生のライフスタイル調査」によると、「共働き夫婦」が望ましいと回答する割合が男子56.5%、女子74.3%で男女ともに過去最高の数値だった。一方で、「専業主婦志向」の割合は、男子（自分の収入のみ）35.7%、女子（相手の収入のみ）16.7%で男女ともに過去最低の数値だった（マイナビ，2020）。上記の結果から、大学生において男女共に働くことができる社会を望んでいることが分かった。

近年では、親が子供の就職活動に積極的に関与するケースなどもみられる。ベネッセ教育総合研究所（2016）の調査によると、「進路や就職に関しては、保護者の意見を重視したい（した）」と回答した大学生は、2012年から2016年の間でわずかに増加している。また、「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」と回答した大学生は約半数で、男女別にみると女子の方が親へ従う傾向にあることが示されている（ベネッセ教育総合研究所，2016）。このように、現在の大学生は就職活動や日常生活の場面で、何らかの形で親に頼っていることが分かる。実際に、筆者自身も就職活動のことを父親に比べ母親に相談することが多かった。自身の就職活動中に会った女子学生の中にも、母親に相談している人が多く、その中で親の影響を受けている人も見受けられた。このような経験から、親の態度が女子大学生のライフコース観・キャリア意識に影響を及ぼしているのではないかという疑問を抱いた。

そこで、女子大学生のライフコース観やキャリア意識に影響を与えているのは、子供にとって身近な存在である母親であり、母親の職業期待や性役割態度によって変化するのではないかと考えた。また、母親との関係性によって、影響の受けやすさが異なるのではないかと考えた。

## 1.2 先行研究

### 1.2.1 性別役割に関する研究

日本における性別役割意識と実態についてみていく。内閣府（2019）が行った「男女共同参画社会に関する世論調査」によると、男女ともに「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方に反対している割合が半数以上だが、実際には男性が仕事を優先し、女性は家庭を優先しているということが示された。このように、意識の上では伝統的な性別役割分業

意識を否定する人が多いが、「男性が仕事をし、女性が家事・育児をする」という構造に変化はないことが伺える。なぜ、構造として性別役割分業は残ったままなのだろうか。

性役割態度に与える原因として、周囲の環境によるものが挙げられる。石黒格(1998)は、15歳から69歳を対象に、対人環境が個人の態度に与える影響を検討した、その結果、対人環境が性役割について肯定的であるほど、回答者も性役割に肯定的になることを明らかにした。このように、周囲の環境によって、自身の性役割観が規定されているという。また、その中でも親が子供の性役割態度に関連していることを示す研究が多くある。伊藤裕子(1997)は、高校生の男女を対象に、性差間の形成環境が子供の性別役割分業意識と関連しているかを調査している。その結果、親の伝統的な性役割態度や期待を認知しているほど、伝統的な性役割への意識が高く、男子に比べ女子の方が家族環境の及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。日下部典子(2009)は、母親の就労状況と大学生の育児観に及ぼす影響を検討したところ、就学前に母親が就労していた学生は、出産後も母親が仕事を継続することが望ましいと回答する人が多いことが明らかとなった。幼児期に母親が就労していないほど、子供は伝統的な性別役割分業意識を抱きやすいことが分かった。佐々木尚之(2012)では、日本版総合的社会調査(JGSS)の個票データを用いて、日本人の性別役割分業意識の数世紀を検討したところ、年齢や時代・世代の効果を除いても、高学歴の父親を持つ女性と15歳時に正規雇用で働いていた母親を持つ男女が、平等的な性役割態度を有することが明らかとなった。

日本において、未だ性別役割観が根付いていることが示された。また、親の就労状況・学歴・性役割態度などが子供の性役割態度に影響を及ぼしていることが分かった。特に男子より女子の方が親からの影響を受けやすい傾向にあるということが見られた。

### 1.2.2 青年期における親子関係の研究

ここでは、青年期における親子関係の研究についてまとめる。若原まどか(2003)は男女大学生を対象に、親の愛情・尊敬と同一視の関連について検討した。その結果、親への愛と尊敬を持っている人ほど、親を同一視し、意識的に親をモデルとする点において顕著な結果となった。また、親の態度を無意識的に取り入れる点においては、男子より女子の得点が高かった。

青年期における親子関係の研究では、母親と娘との関係に強い結びつきがあるとされているものが多い。小高恵(2008)は、中学1年生から大学4年生の男女を対象に、青年の親への態度の発達的变化を調査した。その結果、青年は父親に比べ母親からポジティブな影響を受け、特に母親と娘関係がより密接的であることが明らかとなった。また、青年期以降においても、母親と娘の関係が親密であることを示す研究がある。藤原あやの・伊藤裕子(2007)は、青年期後期から成人期初期(20歳台から40歳未満)の女性を対象に、ライフステージの違いによる母娘関係を調査した。その結果、親との同居を続ける未婚の社会人女性が、親と依存関係になることが示された。母と娘の濃密で依存的な関係は青年期以降も維持されることが明らかになった。ここから、母娘関係は青年期およびそれ以降も続く長期的な関係であることが分かる。

さらに、母親と娘の関係性をいくつかの型に分類した研究がある。水本深喜・山根律子(2010)は、女子大学生とその母親を対象にして、青年期から成人移行期にあたる娘と母

親の距離を検討し、母娘関係を「密着型」、「依存型」、「母子関係疎外型」、「自立型」に類型化した。「密着型」は母親との行動的・精神的距離が近いタイプで、「依存型」は母親との親密な関係のなかで息苦しさを感じているタイプで、「母子関係疎外型」は母親と行動的・精神的距離が遠いタイプで、「自立型」は行動的距離が遠く・精神的距離が近いタイプであると説明されている（水本・山根，2010）。その中でも、「密着型」と「依存型」は母親との距離の近さが娘の心理的分離や距離を抑制することを明らかにした（水本・山根，2010）。このように母親と娘の関係と一口にしても、様々な親子の関係が見受けられる。また、水本深喜（2018）は男女大学生を対象に親への親密性と親子間差との関連を検討した。その結果、母親の価値観へのとらわれは息子より娘で高く、娘が抱く親の価値観へのとらわれは父親より母親で大きいことが分かった。水本（2018）はさらに、「母子関係の4類型」と子の精神的適応・発達との関連について検討した。その結果、親の価値観へのとらわれは、いずれの組み合わせの親子関係の中でも「親子関係疎遠型」で最も低く、「密着型」で最も高いことを明らかにした。また、親への価値観へのとらわれと自立性との間に弱い負の相関があり、息子・娘共に父母から心理的に分離していることは、この自立性を高めることを示した。このように親と心理的距離が近いことによって子供が親の価値観に影響を受けやすくなり、それが子供の自立性を抑制することにつながるということが分かった。

以上から、青年期の子供にとって父親より母親からの影響が大きく、特に母―娘間には強い関係性があり、様々なタイプがあることが分かった。このような母親と娘の関係性は、大学生や青年期以降にもみられるほど、強く密接した関係であることが先行研究によって示されている。このような青年期における母と娘の関係が、子どもの自立性などに影響することから、子どもの職業選択に影響を及ぼすと思われる。

### 1.2.3 青年期の就業選択に関する研究

青年の職業選択に親が及ぼす影響に関する既存の研究についてまとめる。青年期の職業選択に関する研究には、親の職業継承・期待と子供の職業選択との関連を扱った研究がある。小川一夫・田中宏二（1980）は、女子中学生・高校生を対象に、娘の職業選択への親の職業的影響を検討したところ、親の職業や継承期待が娘の職業選択に影響を及ぼすことを明らかにした。特に、親が教師、医師、看護師などの専門・技術的職業である場合、継承性が高いことが示唆されている。鹿内啓子（2007）は、男女大学生を対象に、志望職業と親の態度認知の関連性を調査した。その結果、教員志望の大学生は企業、大学院志望および未定に比べ、親のアドバイスや期待の影響が大きいことが明らかにした。また、公務員、教員志望の女子は男子に比べて、母親を望ましいモデルとして認知していることが示唆された。このように特定の職業において、親の職業継承や期待が子どもの職業選択に大きく関係していることが分かった。

親のライフコースと子供の職業観を扱った研究もある。村松幹子（1994）は親の影響を中心に女子学生のライフコース間の形成について検討したところ、母親が仕事志向のライフコースであれば、娘も仕事思考のライフコースを理想とすることが示された。また、母親が「退職型」や「無職型」のような家庭志向のライフコースであれば、娘も家庭志向のライフコースを理想とする傾向があることが分かった。上記のような親のライフコースが子供の職業観に影響を研究もある一方で、異なる意見も見られた。三輪哲・青山祐季（2014）は、

中学 3 年生とその保護者を対象に子供の意識に対する母親の働き方の影響を検討した。その結果、専業主婦の母親を持つ子どもに比べて、フルタイムで働く母親を持つ子どもの方が職業生活と私生活の充足イメージが低いことが明らかになった。また、職業生活充足イメージでは女子、私生活充足イメージでは男子のみで効果があった（三輪・青山, 2014）。母親の就業形態と子どもの職業観との関連についての研究は異なった知見が示された。

就職活動と親のサポートを扱った研究である。星野冴香・寺田盛紀（2012）は、大学 4 年生の女子を対象に、親の態度・コミュニケーションと就職活動の満足度を検討したところ、親の支援的な態度が就職活動の満足度を高めることが明らかとなった。田澤実・梅崎修（2016）は、大学 3 年生の男女を対象に、保護者の就職活動の関心度とその満足度が大学生のキャリア意識と関連するかを調査した。その結果、保護者が就職活動へ関与し、大学生がそのかわりに満足している場合、明確なキャリア意識を保持していることが示唆された。このように就職活動において、親との関わりは大学生の就職活動の満足度やキャリア意識に影響を及ぼすことがすでに分かっている。

ジェンダーと職業選択との関連を扱った研究がある。藤原善美（2009）は、大学生の男女を対象に、ジェンダー・アイデンティティとライフコース展望における自立性の関連を調査した。その結果、男子学生はジェンダー・アイデンティティによる有意な差は示されず、女子学生において男性性と女性性の両方が内面化していることが、自立的なライフコース展望が可能となることを明らかにした。また、親の性役割観が子供の期職業選択に影響を与えるという研究がある。伊藤（1995）は、女子大学生とその父母を対象に、女子青年の職経歴選択と父母の養育態度との関連を調査し、以下の結果が見られた。1 点目は、父母の養育態度認知において、伝統的役割分業と家庭第一主義に否定的であるほど娘は職業志向に、肯定的であるほど家庭志向に傾くことである。2 点目は、経済的自立を含む社会参加は、母親のみで有意であり、それに肯定的であるほど娘の職業志向が強くなることである。3 点目は、母親が娘の自立性尊重を尊重するほど、娘の職業志向が強くなることである。また、伊藤（1997）は、高校生の男女を対象に、性差間の形成環境と子供の性役割選択（職経歴・夫婦関係）との関連を調査した。その結果、親の性別化期待や分業意識が親の職経歴期待が子供の性役割観を媒介し、女子学生の性役割選択（職経歴）に大きく影響していることが示された。このように男子に比べ女子において、自己の内面化されたジェンダー観や親の性役割態度が職業選択に影響することが分かっている。

青年期の職業選択において、親の職業継承や期待、ジェンダー観が影響を及ぼし、男子学生に比べ女子学生の方が親の影響を受けやすいという研究が多くあった。また、大学生の就職活動において親からのサポートがポジティブな影響をもたらすということも示された。

#### 1.2.4 家族システム研究

立木茂雄（2015）はオルソンらが提唱した円環モデルの妥当性を検討し、これに基づく家族システム評価尺度 FACESKG を開発した。円環モデルでは、きずなの次元を「家族の成員がたがいに対して持つ情緒的結合」と定義し、情緒的結合・境界・時間・などの変数から評価・測定される（立木, 2015）。家族のきずなの極端に強い段階（ベッタリ）と極端に弱い段階（バラバラ）の 2 つの構成要素のバランスの取れた段階（ピッタリとさらさら）の場合に、家族システムは機能し、個人の成長も促される（立木, 2015）。

もう一方で、円環モデルにおけるかじとりの次元を「状況的・発達のストレスに応じて家族（夫婦）システムの権力構造や役割関係、関係規定を変化させる能力」と定義し、具体的には、家族の権力構造（自己主張と支配）や交渉（話し合いや処理）のスタイル、役割関係、関係規範などの変数から評価・測定される（立木，2015）。家族のかじとりの極端に強い段階（てんやわんや）と極端に弱い（融通なし）の間の段階（キッチリと柔軟）に位置する場合、最も健康な家族システムである（立木，2015）。

本研究では、前章でまとめた母娘の関係性だけではなく、家族機能が女子大学生のライフコース志向とキャリア意識に影響を及ぼすのかという点についても検討したい。

### 1.3 本稿の目的と意義

これまでの研究では、以下のことが明らかとなっている。個人の性役割態度を形成する要因として周囲の環境が挙げられ、特に親が関連するとされている研究が多い。また、青年期における職業選択に与える要因として、親の職業継承期待や自身の性役割観が規定することが挙げられる。そこで、母親の養育態度が直接的に女子大学生のライフコース観やキャリア意識に影響を与えるか調査したい。また、職業選択において、男子に比べ女子の方が親、特に母親の影響を受けやすいことから、母と娘の関係性の強度によって親の態度の影響受けやすくなるのかも合わせて調査する。

そこで本研究では、以下の2点について検討する。1点目は、「母親の態度や親子の関係性が、女子大学生のライフコース観・キャリア意識に影響を与えるか」を検討する。また、合わせて将来に対する母親の態度、家族システム、母親の職業経歴との関連も示したい。2点目は、「母娘の距離が親密的であるほど、親の態度が女子大学生のキャリア意識に影響を及ぼすか」を検討する。

これらのことを明らかにすることで、女子大学生が就職活動を通して将来のライフコースやキャリア選択と向き合う際に、母親とどのように関係を築いていくべきかを提言したい。

## 2 方法

### 2.1 調査方法

本研究は2020年9月27日から10月25日にかけて、同志社大学および同志社女子大学の学生を中心とした女子学生にGoogleフォームを用いて調査を行った。

調査全体の回収数は、220票であり、そのうち回答に不備のみられた6票を除外した有効回答数は214票であった。なおGoogleフォームには、調査の趣旨・得られたデータの使用目的から回答から個人が特定されたり個人情報漏洩する心配はないことを明記した。得られたデータはすべて、統計解析ソフトSPSS（ver.26）で数値化して処理を行い、分析を行った。

### 2.2 調査項目

仮説モデルを図1に示す。本調査において、従属変数は女子大学生の「ライフコース観」と「キャリア意識」を設定した。独立変数には、「将来に対する母親の態度」、「母親の養育態度」、「親密度」、「家族システム」を設定した。詳しい説明は以下にまとめている。

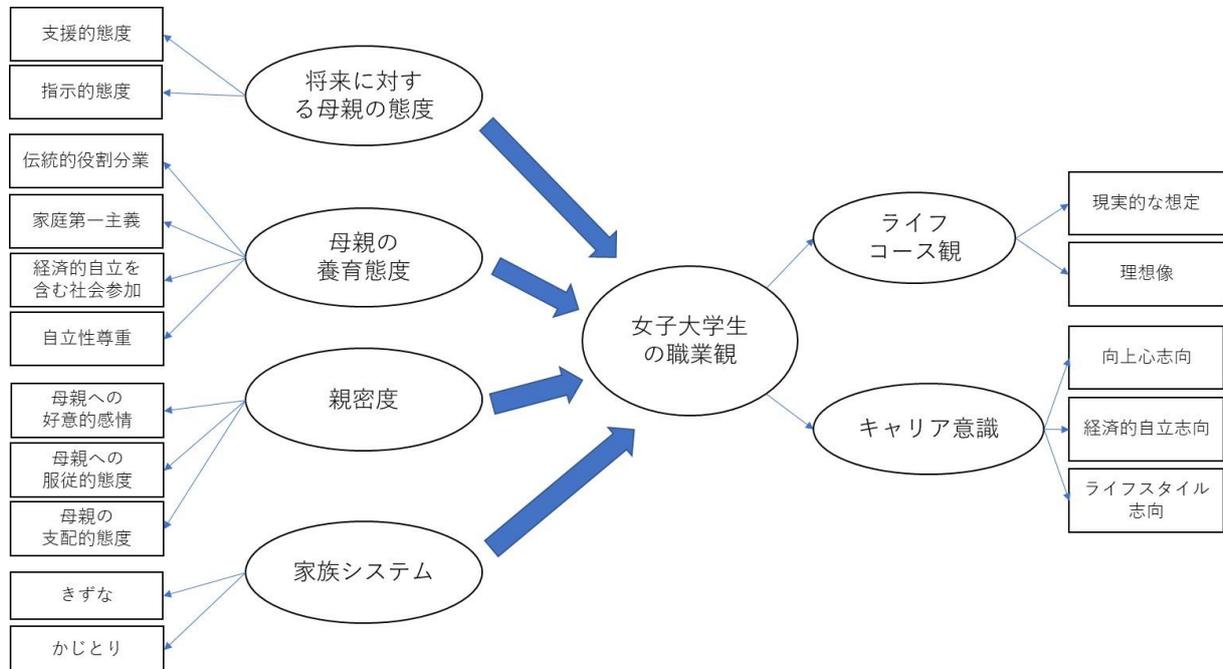


図1 仮説モデル

### (1) 分析に用いる従属変数

女子大学生の「ライフコース観」項目として、松並知子・西尾亜希子（2018）の将来のキャリアプランを訪ねる質問に対する7つの選択肢を参考に作成した。松並・西尾（2018）は将来のキャリアプランを尋ねる質問の回答として、2013年度の厚生労働省の調査を元に全部で7つのキャリアプランを設定した。これらを参考にして、「結婚をしている」「子供を持っている」「専業主婦」「両立」「正規雇用で再就職」「非正規雇用で再就職」と質問を分けて、「現実的に想定するライフコース」と「理想とするライフコース」の2つのパターンで尋ねた。これらのライフコース観を尋ねる項目から、女子大学生が「現実的に想定するライフコース観」と「理想とするライフコース観」を測定する。

女子大学生の「キャリア意識」項目として、吉村英（2014）の「キャリアアンカー項目」と手塚紀子・古屋健（2017）が使用した「ライフキャリア志向性」を参考に作成した。吉村（2014）はScheinの作成したキャリアアンカーの尺度を女子大学生用に用語等を修正した尺度を用いている。その中から「ライフスタイル」に関する項目（項目例自分や家族を優先し、家庭生活に支障のない仕事につきたい）を3項目用いる。また、それらの項目に加えて筆者が独自で作成した「職場を選択する上で休日・休暇の多さは重要ではない」という逆項目を追加した。手塚・古屋（2017）は蘆の作成した「ライフキャリア志向性」の尺度項目を一部抜粋し、就業や進路に関する項目を付け加えて質問紙を作成した。その中から、「向上心」に関する項目（項目例：希望する仕事に就こうと、努力している）を3項目、「経済的

自立」に関する項目（項目例：結婚して夫の収入だけで十分な生活ができたとしても、仕事はしたい）を3項目使用する。また、それらの項目に加えて筆者が独自で作成した「仕事で出世したいと思わない」という向上心に関する逆項目と「結婚後は夫が稼ぐべきだと思う」という経済的自立志向に関する逆項目を追加した。これらのキャリア意識項目から、女子大学生がキャリアを選択する上で重視する価値観を測定する。

表1は、「ライフコース観」と「キャリア意識」のすべての質問項目をまとめた表である。

表1 従属変数の項目一覧

概念	下位概念	質問項目	選択肢	出典・参考
ライフコース志向	現実的な想定	将来結婚している 将来子どもを持っている 出産後も出産前と同じ職場で就業を継続する 出産を機に退職し、その後は専業主婦になる 出産を機に退職し、その後は正規雇用で再就職する 出産を機に退職し、その後は非正規雇用で再就職する	1. まったく そう思わない ～5. とても 強くそう思 う	松並・西尾 (2018)
	理想像	将来結婚することを理想とする 将来子どもを持つことを理想とする 出産後も出産前と同じ職場で就業を継続することを理想とする 出産を機に退職し、その後は専業主婦になることを理想とする 出産を機に退職し、その後は正規雇用で再就職することを理想とする 出産を機に退職し、その後は非正規雇用で再就職することを理想とする	1. まったく当 てはまらない ～5. とてもよ く当てはまる	
キャリア意識	ライフスタイル志向	自分や家族を優先し、家庭生活に支障のない仕事につきたい 自分の生活と仕事のバランスをとることの方が、出世よりも大切だ 仕事のやり方やスケジュールを自分で自由に決められるような職業につきたい 職場を選択する上で休日・休暇の多さは重要ではない（逆転項目）	1. まったく当 てはまらない ～5. とてもよ く当てはまる	吉村 (2014)
	向上心志向	希望する仕事に就こうと、努力している これからの人生(仕事)を通して、さらに自分自身を伸ばして高めていきたい 仕事で難しい問題に直面しても、自分なりに積極的に解決していくつもりだ 仕事で出世したいとは思わない（逆転項目）		手塚・古屋 (2017)
	経済的自立志向	結婚して夫の収入だけで十分な生活ができたとしても、仕事はしたい 結婚しても、夫に経済的に依存しなくて済むようになりたい 一度仕事についたら、定年になるまでキャリアを中断したくない 結婚後は、夫が生活費を稼ぐべきだと思う（逆転項目）		手塚・古屋 (2017)

## (2) 分析に用いる独立変数

「将来に対する母親の態度」項目は星野冴香・寺田盛紀（2012）の「就職活動における母親の態度・コミュニケーション尺度」と鹿内（2005）の「母親の態度認知尺度」を参考に作成した。星野・寺田（2012）の「就職活動における母親の態度・コミュニケーション尺度」からは、子どもの就職活動を応援したり、理解や協力をうかがえたりする母親の支援的な態度に関する項目（項目例：母は私の進路のことを私に任せてくれる）を4項目用いる。鹿内（2005）の「母親の態度認知尺度」からは、子どもの生き方に指図や期待をし、子どもに任せてくれないような母親の指示的な態度に関する項目（項目例：母は私の生き方についていろいろ指図する）を4項目使用する。

「母親の養育態度」項目は伊藤（1995）が作成した「父母の養育態度」を用いる。父母の

実際の養育態度と娘が認知している父母の養育態度を調査した結果、娘は母親の養育態度はかなりの確に認知していることが確認されている（伊藤，1995）．その中から、「伝統的役割分業」に関する項目（項目例：夫と意見が対立した場合妻が折れるべきである）を3項目、「経済的自立を含む社会参加」に関する項目（項目例：女性も職業を通して社会の中で一定の役割を果たすべきである）を3項目、「自立性尊重」に関する項目（項目例：青年期に達した子どもがどのようなことに関心を持とうと親に干渉する権利がない）を3項目、「家庭第一主義」に関する項目（項目例：結婚後は何よりもまず家庭を第一に考えてほしい）を3項目用いる．これらの質問項目に対して、娘側から母親が普段どのように考えているかを5件法で評価させた．

娘と母親の「親密度」項目は藤田ミナ・岡本裕子（2010）が使用した「母娘関係尺度」と水本深喜（2016）の「母親への親密性尺度」を参考に作成した．藤田・岡本（2010）が使用した「母娘関係尺度」からは、母親への支えと信頼の内容が含まれる母親への肯定的な感情に関する項目（項目例：母は私の人生のよき理解者である）を4項目と母親の支配的な態度に関する項目（項目例：母は私を手放したがらない）を4項目用いる．また、母親への肯定的な感情に関する項目として「私は母が好きではない」という逆項目、母親の支配的な態度に関する項目として「母は私の意見を否定しない」という逆項目を筆者が独自で作成し、追加した．水本（2016）の「母親への親密性尺度」からは母親の価値観への捉われているような内容が含まれる母親への服従的な態度に関する項目（項目例：私は何かを判断するとき、「母はどう思うか」が気になる）を5項目用いる．その中の「私は母からどう評価されるか、気になる」という項目は「私は母からどう評価されるか、気にならない」というように逆項目として使用する．

表2は、「将来に対する母親の態度」，「母親の養育態度」，「親密度」のすべての質問項目をまとめた表である．

家族システム項目は立木が作成したFACEKGIV-16のVersion3の尺度値を使用している．この尺度は、きずな・かじとりをそれぞれの8項目のサーストーン尺度により測定する．きずな・かじとりのそれぞれ8項目のうち、「自分の家族の状況に最も当てはまる」と思う項目を選択することにより、当該選択項目に付与された尺度値をもって家族の測定値とする．表3は今回使用した家族システム評価尺度（FACEKGIV-16 version3）のきずな項目、表4はかじとり項目を尺度値順に並べたものである．きずなとは家族成員が互いに対して抱く情緒的なつながりを意味する（立木，2015）．家族のきずなの極端に強い段階は「ベツタリ」、極端に弱い段階は「バラバラ」、この2つの構成要素のバランスのとれた段階を「ピツタリ」「サラリ」として表される．きずな項目の尺度値は、「バラバラ」（-3.5, -2.5）、「サラリ」（-1.5, -0.5）、「ピツタリ」（0.5, 1.5）、「ベツタリ」（2.5, 3.5）となる．一方、かじとりは状況の変化・成長に応じて夫婦・家族システムを柔軟に変化させる能力である（立木，2015）．家族のかじとりが極端に強い段階は「てんやわんや」、極端に弱い段階は「融通なし」、真ん中の段階は「きっちり」「柔軟」に位置する．かじとり項目の尺度値でも同様に、「融通なし」（-3.5, -2.5）、「きっちり」（-1.5, -0.5）、「柔軟」（0.5, 1.5,）、「てんやわんや」（2.5, 3.5）となる．

表2 従属変数の項目一覧

概念	下位概念	質問項目	選択肢	出典・参考
将来に対する母親の態度	支援的態度	母は私の進路のことを私に任せてくれる 母は最終的に決めた進路を応援してくれる 母は私の進路について励ましてくれる 母はわたしのやりたいことをちゃんと理解してくれている	1. まったく当てはまらない～ 5. とてもよく当てはまる	星野・寺田 (2012)
	指示的態度	母は私の生き方についていろいろ指図する 将来の職業や生き方について、母の期待を強く感じる 母は私の今の状態について不満を持っている 母親は私の将来のことを私に任せてくれている(逆転項目)		鹿内 (2005)
母親の養育態度	伝統的役割分業	夫と意見が対立した場合妻が折れるべきである 同じ仕事をしていても男性と女性の給料に多少の差がつくのは当然である 共働きでも家事一切は女性(妻)がするもの	1. まったく当てはまらない～ 5. とてもよく当てはまる	伊藤 (1995)
	経済的自立を含む社会参加	女性も職業を通して社会の中で一定の役割を果たすべきである 不測の事態に備えて女性でも経済力を身に付けておいた方が良い 妻も生活費を稼ぐべきである		
	自立性尊重	青年期に達した子どもがどのようなことに関心を持とうと親に干渉する権利がない 本人さえよければ別にどのような人と結婚してもかまわない 周囲のものがどう思うと自分のやりたいことは成し遂げてほしい		
	家庭第一主義	結婚後は何よりもまず家庭を第一に考えてほしい 女性にとって幸福な結婚は何事にも代えられない 自分の興味や関心のために家庭をおろそかにするようなことは絶対避けるべきである		
親密度	母親への肯定的感情	母は私の人生のよき理解者である 何とか母の支えになってあげたい 母とはなんでも話ができる 母は私の気持ちを理解してくれる 私は母が好きではない(逆転項目)	1. まったく当てはまらない～ 5. とてもよく当てはまる	藤田・岡本 (2010)
	母親の支配的態度	母は私を手放したがらない 母は私のことに何でも口出ししたがる 母は私がやるべきことにまで手を出してくる 母は私が思い通りに行動しないと機嫌が悪くなる 母は私の意見を否定しない(逆転項目)		藤田・岡本 (2010)
	母親への服従的態度	私は何かを判断するとき、「母はどう思うか」が気になる 私は自分の意見に母が賛成してくれないと、不安になる 私は母からどう評価されるか、気にならない(逆転項目) 私は母のアドバイスに従わないと、後ろめたい気がする 私は母に相談せずには、自分で決心できないことが多い		水本 (2016)

表3 家族のきずな項目

設問番号	項目	尺度値
1	たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	-0.5
2	わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	-1.5
3	悩みを家族に相談することがある	1.5
4	家族はお互いの体によくふれあう	3.5
5	家族の間で、用事以外の関係は全くない	-3.5
6	家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がな	-2.5
7	休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	0.5
8	誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	2.5

表4 家族のかじとり項目

設問番号	項目	尺度値
1	問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	0.5
2	私の家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆で補い合うこともある	-0.5
3	困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	-3.5
4	それぞれの家での役割を気軽に交代することができる	1.5
5	家の決まりはみんなが守るようにしている	-1.5
6	みんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない。	2.5
7	問題が起こると家族で話しあいがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がお	-2.5
8	家族で何か決めても、守られたためしがない	3.5

### (3) 属性等に関する項目

属性等に関する項目としては、回答者の「性別」、「年齢」、「学年」、「同居家族」と回答者の母親の「年齢」、「最終学歴」、「職業経歴」の7項目を尋ねた。回答者の「性別」と「学年」、母親の「最終学歴」と「職業経歴」については、当てはまるものを1つ選択してもらう形式で回答を求めた。回答者の「年齢」と母親の年齢は数字で記入してもらう形式で回答を求めた。「同居家族」については、現時点で同居している家族をすべて選択するように回答を求めた。

## 2.3 分析方法

分析については、尺度化・数値化した変数を用い、分析を行った。それぞれの回答について基本的に「まったくそう思わない」「まったくあてはまらない」を1点として、「どちらかといえばそう思わない」「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばあてはまる」を4点、「とても強くそう思う」「とてもよく当てはまる」を5点として扱った。この値をそれぞれの下位概念ごとに足し合わせた合計得点をそれぞれの下位概念の得点として扱った。しかし、ライフコースに関する12項目は項目間の足し算は行わず、独立して分析を行った。

家族システムについては、8つの選択肢に尺度値(表3, 4)の再振り当てを行った。きずな・かじとりそれぞれ得点が高ければ高いほど、極端に強い段階である「ベッタリ」・「てんやわんや」となる。

## 3 調査結果

### 3.1 度数分布

#### (1) 回答者の属性

初めに回答者全体の属性について記述する。大学1年生は10人(4.7%)、大学2年生は16人(7.5%)、大学3年生は31人(14.5%)、大学4年生は157人(73.4%)だった。筆者の知り合いを中心に調査を行った結果、大学4年生からの回答が多くなった。現在父親と同居している人は136人(63.6%)、母親と同居している人は163人(76.2%)、祖父母と同居している人は24人(11.2%)、兄弟(姉妹)と同居している人は101人(47.2%)、一人暮らしは40人(18.7%)であった。

次に回答者の母親の属性について示していく。母親の年齢は32歳から72歳で、平均は51.20歳であった。母親の学歴については、高卒は51人(23.8%)、専門学校卒は25人(11.7%)、短期大学卒は70人(32.7%)、4年制大学卒は61人(28.5%)、その他・無回答は7人(3.2%)であった。母親の職業経歴(図2)については、就業継続型は36人(16.8%)、正規雇用で再就職型は27人(12.6%)、非正規雇用で再就職型は87人(40.7%)、専業主婦型は52人(24.3%)、その他・無回答は12人(5.6%)であった。

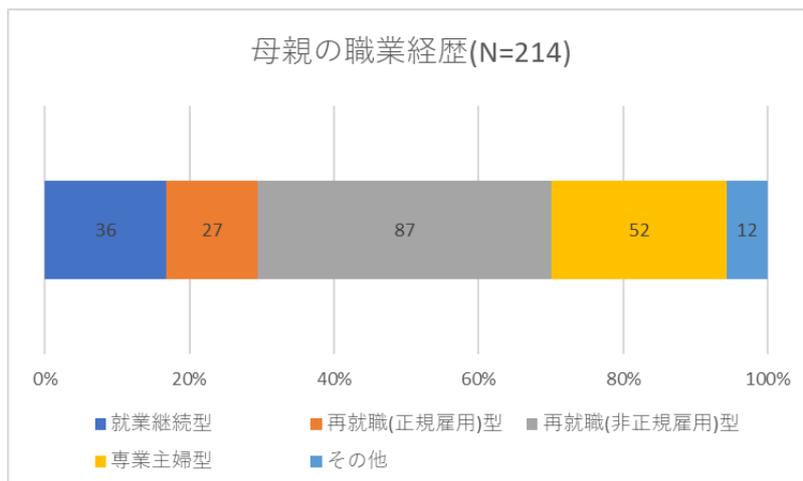


図2 度数分布 母親の職業経歴

## (2) 女子大学生のライフコース観

「現実的に想定されるライフコース」6項目と「理想的なライフコース」6項目についての、グラフを作成した。「現実的に想定するライフコース」の回答結果が図3である。「理想とするライフコース」の回答結果が図4である。このグラフから、半数以上の女子大学生が結婚することを現実的に想定、理想とする人が多いということが読み取れる。現実的に想定することより、理想とすることにおいての方が肯定的な回答をする割合が多かった。また、就業形態においては、「就業継続」を現実的に想定し、理想とする人が多いことが示された。現実的に想定することより、理想とすることにおいての方が「就業継続」と「専業主婦」に肯定的に回答する割合が多くなった。

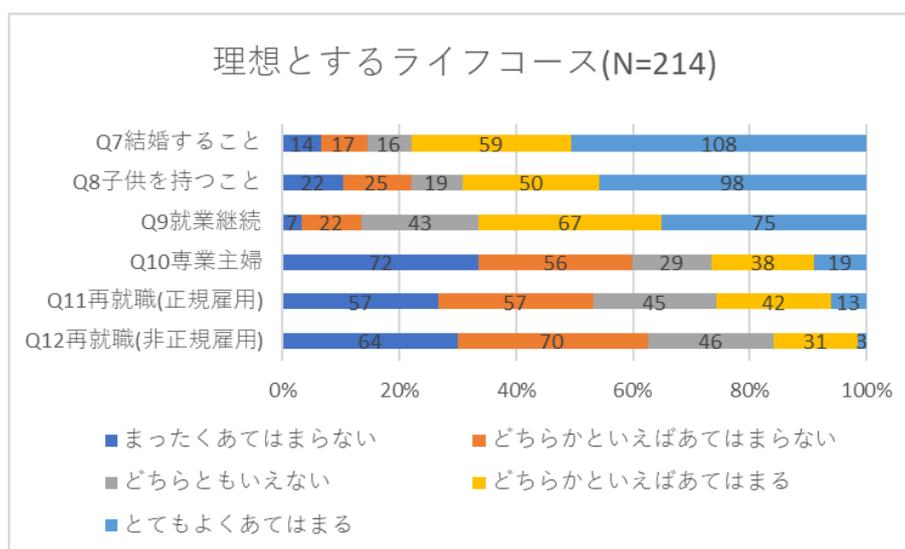


図3 度数分布 女子大学生が現実的に想定するライフコース

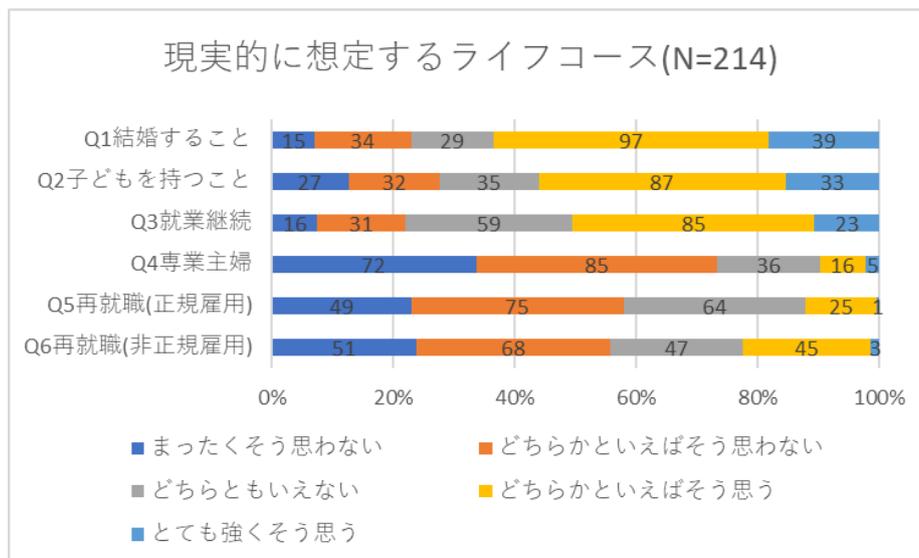


図4 度数分布 女子大学生が理想とするライフコース

### 3.2 重回帰分析

#### 3.2.1 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因

「母親の態度や親子の関係性が、女子大学生のライフコース観・キャリア意識に影響を与えるか」を検証するため、重回帰分析を行った。さらに、家族システムや母親の職業経歴との関連についても検討する。独立変数には「将来に対する母親の態度」、「母親の養育態度」、「親密度」、「家族システム」、「母親の職業経歴」を用いた。従属変数は「現実的に想定するライフコース」、「理想とするライフコース」、「キャリア意識」を用いた。母の職業経歴については、「就業継続」、「専業主婦」、「再就職（正規雇用）」、「再就職（非正規雇用）」、「その他」のそれぞれの選択肢を選んでいれば1、選んでいなければ0としたダミー変数である。すべての分析において、母親の職業経歴の基準は「就業継続型」とした。

##### (1) ライフコース観を従属変数とした重回帰分析

ライフコース観については、「現実的に想定するライフコース」と「理想とするライフコース」計12項目を独立変数として、重回帰分析を行った。現実的に想定されるライフコースの調整済みR2乗値は結婚.152, 子ども.169, 就業継続.018, 専業主婦.138, 再就職（正規雇用）-.033, 再就職（非正規雇用）.087であった。理想とされるライフコースの調整済みR2乗値は結婚.205, 子ども.154, 就業継続.012, 専業主婦.119, 再就職（正規雇用）-.041, 再就職（非正規雇用）.027であった。

「結婚すること」の結果（表5）について記述する。結婚を現実的に想定するにおいて、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と「親密度（母への肯定的感情）」は1%水準で有意であった。「結婚を現実的に想定する」に対して、前者は.254, 後者は.250のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「将来に対する母親の態度（指示的態度）」は10%水準有意であり、「結婚を現実的に想定する」に対して-.178のマイナスの影響を与えていることが分かった。「結婚を理想とする」においては、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は1%水準で有意であり、.331のプラスの影響を与えていることが分かった。「親密度（母への服

従的態度)」と「母の職業経歴（その他）ダミー」は1%水準で有意であった。「結婚を理想とする」に対して、前者は.118のプラスの影響、後者は.117のマイナスの影響を与えていることが分かった。「結婚すること」に関しては、現実的な想定と理想両方において「母親の養育態度（家庭第一主義）」がプラスの影響を与えることが明らかになった。

表5 結婚することの規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	結婚(現実的な想定)			結婚(理想)		
	非標準化係数	標準化係数	ベータ	非標準化係数	標準化係数	ベータ
将来に対する母親の態度						
支援的態度	-.035	.039	-.090	.026	.040	.065
指示的態度	-.060	.034	-.178*	-.050	.035	-.141
母親の養育態度						
伝統的役割分業	-.003	.031	-.008	.045	.032	.104
経済的自立を含む社会参加	.035	.040	.063	-.047	.041	-.082
家庭第一主義	.118	.032	.254***	.162	.033	.331***
自立性尊重	-.038	.033	-.086	-.016	.034	-.033
親密度						
母への肯定的感情	.072	.027	.250***	.038	.027	.127
母の支配的態度	.030	.023	.124	.020	.023	.078
母への服従的態度	.002	.018	.007	.030	.018	.118*
家族システム						
かじとり	.037	.042	.058	.021	.043	.032
きずな	.104	.072	.102	.056	.073	.052
母の職業経歴						
(基準:就業継続型)						
再就職型(正規雇用)	.026	.278	.008	-.114	.283	-.031
再就職型(非正規雇用)	-.347	.218	-.147	-.254	.222	-.102
専業主婦型	-.235	.245	-.087	-.308	.249	-.109
その他	-.826	.397	-.151**	-.674	.404	-.117*
(定数)	1.959	1.073		1.807	1.093	
調整済みR2		.152			.205	
N=214						

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

「子供を持つこと」の結果（表6）について記述する。「子供を持つことを現実的に想定する」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と「親密度（母への肯定的感情）」は1%水準で有意であった。「子供を持つことを現実的に想定する」に対して、前者は.260、後者は.269のプラスの影響を与えていることが分かった。「母親の職業経歴（専業主婦）ダミー」と「母親の職業経歴（その他）ダミー」は5%水準で有意であった。「子供を持つことを現実的に想定する」に対して、前者は-.183、後者は-.169のマイナスの影響を与えていることが分かった。「子供を持つことを理想とする」においては、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は1%水準で有意であり、.332のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母の職業経歴（専業主婦）ダミー」は5%水準で有意であり、「子供を持つことを理想とする」に対して-.184のマイナスの影響を与えていることが分かった。「子供を持つこと」

に関しては、現実的な想定と理想両方において「母親の養育態度（家庭第一主義）」がプラスの影響を与え、「母の職業経歴（専業主婦）」がマイナスの影響を与えることが明らかになった。

表 6 子どもを持つことの規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	子ども(現実的な想定)			子ども(理想)		
	非標準化係数	標準化係数	ベータ	非標準化係数	標準化係数	ベータ
	B	標準誤差		B	標準誤差	
将来に対する母親の態度						
支援的態度	-.041	.042	-.098	-.002	.047	-.005
指示的態度	-.048	.037	-.133	-.054	.041	-.133
母親の養育態度						
伝統的役割分業	-.001	.033	-.003	.032	.037	.064
経済的自立を含む参加	.048	.043	.081	-2.790E-5	.048	.000
家庭第一主義	.131	.035	.260***	.185	.039	.332***
自立性尊重	-.053	.035	-.110	-.033	.039	-.062
親密度						
母への肯定的感情	.083	.028	.269***	.051	.032	.148
母の支配的態度	.033	.024	.126	.019	.027	.067
母への服従的態度	-.006	.019	-.021	.030	.021	.101
家族システム						
かじとり	-.035	.045	-.052	-.005	.050	-.006
きずな	.104	.077	.095	.063	.086	.052
母の職業経歴						
(基準:就業継続型)						
再就職型(正規雇用)	.005	.297	.001	-.086	.331	-.021
再就職型(非正規雇用)	-.330	.233	-.130	-.202	.260	-.072
専業主婦型	-.533	.262	-.183**	-.593	.292	-.184**
その他	-1.001	.424	-.169**	-.603	.473	-.092
(定数)	1.476	1.147		1.352	1.279	
調整済みR2		.169			.154	
N=214						

\*\*\*p<1%, \*\*p<5%, \*p<10%

「就業継続」の結果（表 7）について記述する。「就業継続を現実的に想定する」において、「母親の養育態度（自立性尊重）」は5%水準で有意であり、-.205のマイナスの影響を与えていることが分かった。「就業継続を理想とする」において、「将来に対する母親の態度（支援的態度）」は10%水準で有意であり、.181のプラスの影響を与えていることが分かった。

表 7 就業継続の規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	就業継続(現実的な想定)			就業継続		
	非標準化係数	標準化係数		非標準化係数	標準化係数	
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
将来に対する母親の態度						
支援的態度	.043	.039	.118	.067	.040	.181*
指示的態度	-.022	.034	-.069	-.005	.035	-.017
母親の養育態度						
伝統的役割分業	-.026	.031	-.068	-.017	.032	-.044
経済的自立を含む参加	.043	.040	.085	.066	.041	.126
家庭第一主義	-.009	.033	-.022	-.028	.033	-.062
自立性尊重	-.085	.033	-.205**	-.035	.034	-.082
親密度						
母への肯定的感情	-.027	.027	-.099	-.039	.027	-.140
母の支配的態度	.012	.023	.052	.017	.024	.073
母への服従的態度	-.004	.018	-.018	.003	.018	.013
家族システム						
かじとり	.042	.042	.071	.020	.043	.034
きずな	-.013	.072	-.014	.098	.074	.101
母の職業経歴 (基準:就業継続型)						
再就職型(正規雇用)	-.283	.278	-.087	-.032	.286	-.010
再就職型(非正規雇用)	-.337	.218	-.153	-.156	.224	-.069
専業主婦型	.159	.245	.063	.330	.252	.128
その他	.354	.398	.070	.614	.408	.117
(定数)	3.891	1.075		3.108	1.104	
調整済みR2			.018			.012
N=214						
***p<1%,**p<5%,*p<10%						

「専業主婦」の結果（表 8）について記述する。「専業主婦を現実的に想定する」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は1%水準で有意であり、.249のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「将来に対する母親の態度（支援的態度）」と「母親の職業経歴（正規雇再就職型）ダミー」は5%水準で有意であった。「専業主婦を想定すること」に対して、前者は-.210のマイナスの影響、後者は.168のプラスの影響を与えていることが分かった。「家族システム（かじとり）」は10%水準で有意であり、「専業主婦を現実的にすること」に対して.112のプラスの影響を与えていることが分かった。「専業主婦を理想とする」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は1%水準で有意であり、.265のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「親密度（母への服従的態度）」と「家族システム（かじとり）」は5%水準で有意であった。「専業主婦を理想とする」に対して、前者は.153、後者は.148のプラスの影響を与えていることが分かった。「専業主婦」に関しては、現実的に想定すると理想とする両方において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」がプラスの影響を与えていることが明らかになった。

1%水準で有意な結果が見られた、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と専業主婦を「現実的に想定すること」と「理想とすること」のそれぞれで単回帰分析を行った（図5, 6）。図5, 6からどちらも正の相関を示していることが分かる。そのため、家庭第一主義的な母

親の態度を認知する娘ほど、専業主婦を「現実的に想定する」,「理想とする」傾向にあるといえる。

表 8 専業主婦の規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	専業主婦(現実的な想定)			専業主婦(理想)		
	非標準化係数	標準化係数	ベータ	非標準化係数	標準化係数	ベータ
	B	標準誤差		B	標準誤差	
将来に対する母親の態度						
支援の態度	-.071	.034	-.210**	-.062	.046	-.139
指示的態度	-.006	.030	-.020	-.027	.041	-.070
母親の養育態度						
伝統的役割分業	.042	.028	.118	.058	.037	.120
経済的自立を含む参加	-.052	.035	-.109	-.030	.048	-.048
家庭第一主義	.101	.029	.249***	.143	.038	.265***
自立性尊重	-.020	.029	-.050	-.057	.039	-.110
親密度						
母への肯定的感情	.025	.023	.100	.001	.031	.004
母の支配的態度	-.031	.020	-.146	-.028	.027	-.098
母への服従的態度	.020	.016	.094	.043	.021	.153**
家族システム						
かじとり	.061	.037	.112*	.109	.050	.148**
きずな	.033	.063	.037	-.079	.085	-.067
母の職業経歴						
(基準:就業継続型)						
再就職型(正規雇用)	.510	.244	.168**	.288	.329	.071
再就職型(非正規雇用)	.282	.192	.137	.091	.258	.033
専業主婦型	.018	.215	.008	-.216	.290	-.069
その他	-.392	.349	-.082	-.489	.470	-.077
(定数)	2.431	.943		2.745	1.270	
調整済みR2		.138			.119	
N=214						
***p<1%,**p<5%,*p<10%						

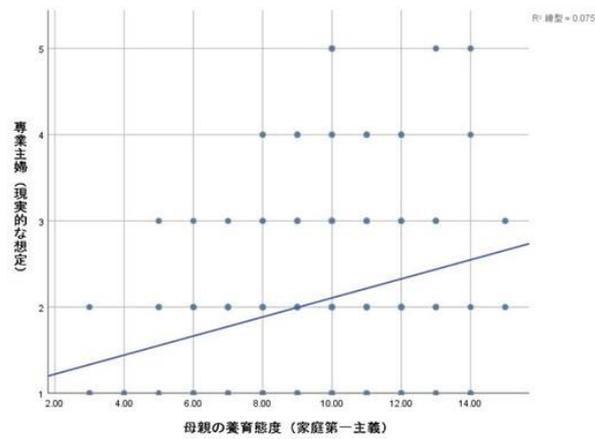


図5 家庭第一主義と専業主婦を現実的に想定することとの関連

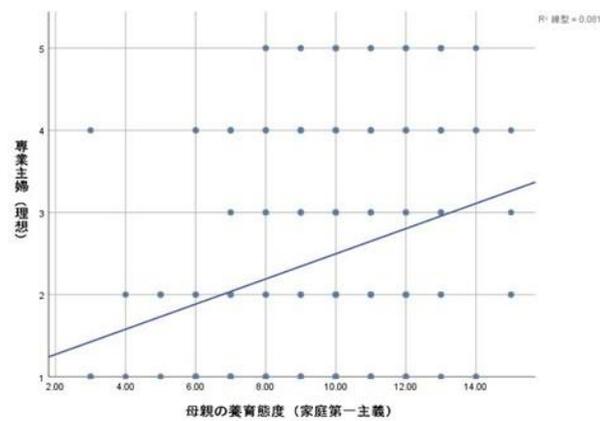


図6 家庭第一主義と専業主婦を理想とすることとの関連

「再就職（正規雇用）」の結果（表9）について記述する。「再就職（正規雇用）を現実的に想定する」においては、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は10%水準で有意であり、.135のプラスの影響を与えていることが分かった。一方、「再就職（正規雇用）を理想とする」ことにおいて、有意な結果は見られなかった。

表 9 再就職（正規雇用）の規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	正規雇用で再就職(現実的な想定)			正規雇用で再就職(理想)			
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	
将来に対する母親の態度							
	支援的態度	.040	.036	.124	.032	.046	.079
	指示的態度	.019	.032	.069	.029	.041	.081
母親の養育態度							
	伝統的役割分業	-.007	.029	-.022	-.047	.037	-.108
	経済的自立を含む参加	.014	.037	.030	-.055	.048	-.094
	家庭第一主義	.052	.030	.135*	.036	.038	.072
	自立性尊重	.008	.030	.021	.023	.039	.047
親密度							
	母への肯定的感情	-.024	.024	-.099	.011	.031	.036
	母の支配的態度	-.003	.021	-.014	.019	.027	.073
	母への服従的態度	.003	.017	.012	.014	.021	.052
家族システム							
	かじとり	.009	.039	.017	-.018	.050	-.027
	きずな	.065	.066	.076	.018	.085	.016
母の職業経歴							
	(基準:就業継続型)						
	再就職型(正規雇用)	.164	.256	.057	.013	.329	.003
	再就職型(非正規雇用)	-.026	.201	-.013	.075	.258	.030
	専業主婦型	.010	.226	.004	-.069	.290	-.024
	その他	-.064	.366	-.014	.477	.470	.082
(定数)		1.216	.989		1.376	1.269	
調整済みR2				-.033			-.041
N=214							
***p<1%, **p<5%, *p<10%							

「再就職（非正規雇用）」の結果（表 10）について記述する。「再就職（非正規雇用）を現実的に想定する」において、「母親の養育態度(家庭第一主義)」は 1%水準で有意であり、.232 のプラスの影響を与えていることが分かった。「親密度（母への服従的態度）」は 5%水準で有意であり、「再就職（非正規雇用）を現実的に想定する」に対して.199 のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」と「親密度（母への肯定的感情）」は 10%水準で有意であった。「再就職（非正規雇用）を想定する」に対して前者は-.142、後者は-.188 のマイナスの影響を与えていることが分かった。

「再就職（非正規雇用）を理想とする」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は 1%水準で有意であり、.231 のプラスの影響を与えていることが分かった。「再就職（非正規雇用）」に関して、現実的に想定すると理想とする両方において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」がプラスの影響を与えていることが明らかになった。

1%水準で有意な結果が見られた、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と再就職（非正規雇用）を「現実的に想定すること」と「理想とすること」のそれぞれで単回帰分析を行った（図 7, 8）。図 7, 8 からどちらも正の相関を示していることが分かる。そのため、家庭第一主義母親の態度を認知する娘ほど、再就職（非正規雇用）を「現実的に想定する」、「理想とする」傾向にあることが分かった。

表 10 再就職（非正規雇用）の規定要因（現実的な想定と理想の比較）

	非正規雇用で再就職(現実的な想定)			非正規雇用で再就職(理想)		
	非標準化係数	標準化係数	ベータ	非標準化係数	標準化係数	ベータ
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
将来に対する母親の態度						
支援的態度	.002	.039	.006	-.017	.039	-.047
指示的態度	-.030	.034	-.095	-.004	.034	-.012
母親の養育態度						
伝統的役割分業	.024	.031	.062	-.011	.031	-.029
経済的自立を含む参加	-.074	.040	-.142*	-.059	.040	-.117
家庭第一主義	.103	.032	.232***	.100	.032	.231***
自立性尊重	-.021	.033	-.050	-.013	.033	-.032
親密度						
母への肯定的感情	-.051	.026	-.188*	-.001	.026	-.003
母の支配的態度	-.015	.023	-.066	-.020	.023	-.089
母への服従的態度	.046	.018	.199**	.029	.018	.127
家族システム						
かじとり	.041	.041	.069	.015	.042	.026
きずな	-.052	.071	-.054	-.020	.071	-.022
母の職業経歴 (基準:就業継続型)						
再就職型(正規雇用)	.226	.275	.068	.000	.276	.000
再就職型(非正規雇用)	.069	.215	.031	.083	.216	.038
専業主婦型	-.246	.242	-.096	-.332	.243	-.133
その他	.072	.393	.014	-.194	.394	-.038
(定数)	3.261	1.061		2.480	1.065	
調整済みR2	.087			.027		
N=214						
***p<1%,**p<5%,*p<10%						

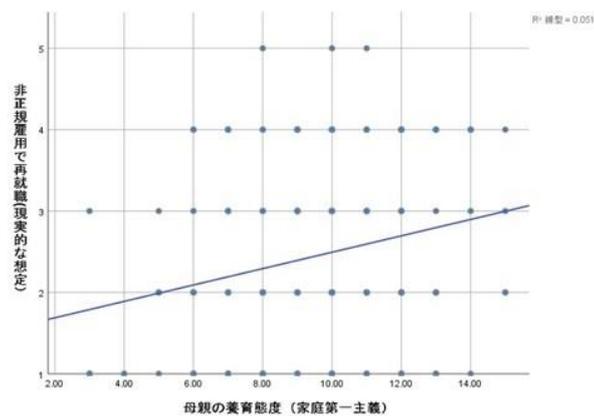


図 7 家庭第一主義と再就職（非正規雇用）を現実的に想定することとの関連

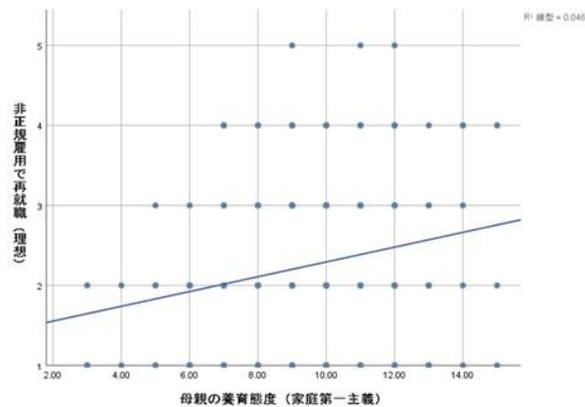


図8 家庭第一主義と再就職（非正規雇用）を理想とすることとの関連

## (2) キャリア意識を従属変数とした重回帰分析

キャリア意識については、「ライフスタイル志向」、「向上心志向」、「経済的自立志向」の3つの下位概念を独立変数として、重回帰分析を行った。この分析の結果は、表11である。調整済みR2乗値は「ライフスタイル志向」.070、「向上心志向」.016、「経済的自立志向」.132であった。

「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」が1%水準で有意であり、.329のプラスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」が5%水準、「親密度（母への肯定的感情）」は10%水準で有意であった。「向上心志向」に対して、前者は.163、後者は.166のプラスの影響を与えていることが分かった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」と「母親の養育態度（家庭第一主義）」が1%水準で有意であった。前者は.230のプラスの影響、後者は-.260のマイナスの影響を与えていることが分かった。また、「将来に対する母親の態度（指示的態度）」と「母親の養育態度（伝統的役割分業）」は10%水準で有意であった。前者は-.170、後者は-.129のマイナスの影響を与えていることが分かった。

1%水準で有意な結果が見られた、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と「ライフスタイル志向」と「経済的自立志向」のそれぞれで単回帰分析を行った（図9, 10）。図9, 10から、「ライフスタイル志向」は正の相関、「経済的自立志向」は負の相関を示していることが分かる。そのため、家庭第一主義的な母親の態度を認知する娘ほど、「ライフスタイル志向性が高い」、「経済的自立志向性が低い」傾向にあることが示された。さらに、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」と「経済的自立志向」で単回帰分析を行った（図11）。図11から、正の相関を示していることが分かった。つまり、経済的自立を促す母親の態度を認知する娘ほど、「経済的自立志向性が高い」傾向にあることが示された。

表 11 キャリア意識の規定要因

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
将来に対する母親の態度									
支援的態度	-.062	.087	-.075	.098	.100	.108	.052	.120	.045
指示的態度	.036	.076	.051	.029	.087	.036	-.173	.105	-.170*
母親の養育態度									
伝統的役割分業	-.006	.070	-.007	-.062	.080	-.063	-.161	.096	-.129*
経済的自立を含む参加	-.051	.089	-.044	.210	.103	.163**	.379	.123	.230***
家庭第一主義	.325	.072	.329***	-.044	.083	-.040	-.366	.099	-.260***
自立性尊重	.095	.073	.100	-.071	.084	-.067	-.044	.101	-.032
親密度									
母への肯定的感情	.050	.059	.081	.113	.068	.166*	.013	.081	.015
母の支配的態度	-.063	.051	-.122	.043	.058	.075	.109	.070	.148
母への服従的態度	.058	.040	.112	-.038	.046	-.066	.012	.055	.016
家族システム									
かじとり	.119	.093	.089	-.112	.107	-.075	-.194	.128	-.102
きずな	-.117	.160	-.054	.114	.183	.047	.006	.219	.002
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	-.876	.617	-.119	.146	.709	.018	-1.238	.849	-.118
再就職型(非正規雇用)	-.474	.484	-.095	.284	.556	.051	-.707	.665	-.099
専業主婦型	-.744	.544	-.130	.691	.625	.108	.293	.748	.036
その他	-.921	.882	-.079	.789	1.012	.061	.313	1.212	.019
(定数)	12.912	2.383		9.946	2.737		14.256	3.276	
調整済みR2	.070			.016			.132		
N=214									
***p<1%,**p<5%,*p<10%									

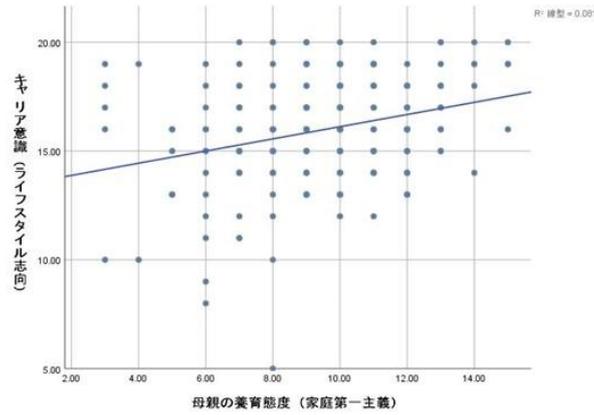


図9 家庭第一主義とライフスタイル志向との関連

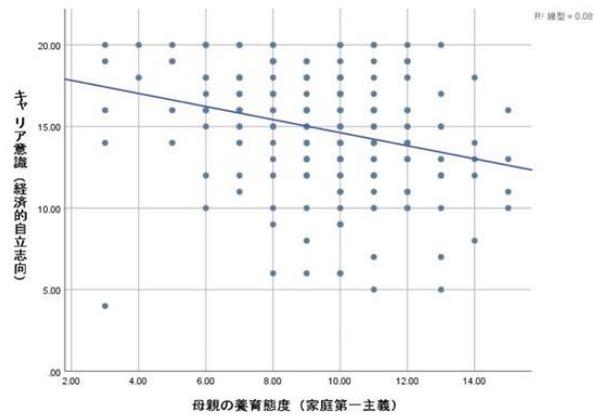


図10 家庭第一主義と経済的自立志向との関連

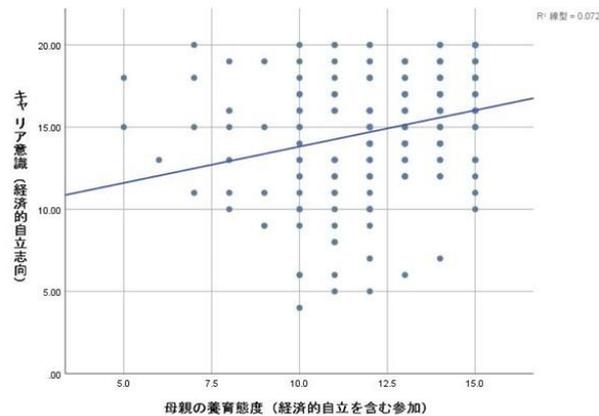


図11 経済的自立を含む社会参加と経済的自立志向との関連

### 3.2.2 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較

「母娘の距離が親密的であるほど、親の態度が女子大学生のキャリア意識に影響を及ぼすか」を検証するため、親密度の下位尺度得点を低得点群と高得点群に2分割し重回帰分析を行った。親密度は、「母親への肯定的感情」、「母親の支配的態度」、「母親への服従的態度」の3つの下位概念を用いる。独立変数は「母親の養育態度」、「母親の職業経歴」を用いた。母の職業経歴については、「就業継続」、「専業主婦」、「再就職（正規雇用）」、「再就職（非正

規雇用)」、「その他」のそれぞれの選択肢を選んでいれば1、選んでいなければ0としたダミー変数である。すべての分析において、母親の職業経歴の基準は就業継続型とした。従属変数は「キャリア意識」を用いた。

#### (1) 母親への肯定的感情

「親密度(母親への肯定的感情)」の低得点群の結果(表12)について記述する。調整済みR<sup>2</sup>乗値は「ライフスタイル志向」.052,「向上心志向」-.045,「経済的自立志向」.088であった。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度(家庭第一主義)」が1%水準で有意であり,.305のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の職業経歴(専業主婦)ダミー」は5%水準で有意であり,-.262のマイナスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、有意な結果は見られなかった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度(家庭第一主義)」が1%水準で有意であり,-.280のマイナスの影響を与えていることが分かった。

「親密度(母親への肯定的感情)」の高得点群の結果(表13)について記述する。調整済みR<sup>2</sup>乗値は「ライフスタイル志向」.129,「向上心志向」.140,「経済的自立志向」.222であった。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度(家庭第一主義)」が1%水準で有意であり,.383のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の養育態度(自立性尊重)」が1%水準で有意であり,.194のプラスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、「母親の養育態度(経済的自立を含む社会参加)」が1%水準で有意であり,.382のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の養育態度(自立性尊重)」が5%水準で有意であり,-.261のマイナスの影響を与えていることが分かった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度(経済的自立を含む参加)」が1%水準で有意であり,.387のプラスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の養育態度(家庭第一主義)」が5%水準で有意であり,-.280のマイナスの影響を与えていることが分かった。

表 12 キャリア意識の規定要因（母親への肯定的感情の低得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	.035	.089	.040	-.024	.104	-.026	-.155	.120	-.132
経済的自立を含む参加	.076	.121	.066	-.047	.140	-.038	.051	.162	.033
家庭第一主義	.335	.105	.305***	-.015	.122	-.013	-.431	.141	-.287***
自立性尊重	.006	.087	.007	.110	.102	.111	.032	.117	.026
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	-.774	.771	-.109	.789	.897	.100	-.376	1.035	-.039
再就職型(非正規雇用)	-.324	.613	-.066	.107	.713	.020	-.581	.823	-.086
専業主婦型	-1.547	.720	-.262**	.515	.837	.079	1.214	.967	.150
その他	-.363	1.031	-.034	.439	1.200	.037	.870	1.386	.060
(定数)	12.157	2.215		14.895	2.577		18.670	2.976	
調整済みR2		.052			-.045			.088	
N=214									

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

表 13 キャリア意識の規定要因（母親への肯定的感情の高得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	-.035	.105	-.038	-.111	.116	-.111	-.132	.148	-.098
経済的自立を含む参加	-.199	.129	-.168	.499	.142	.382***	.679	.181	.387***
家庭第一主義	.337	.102	.383***	-.040	.112	-.041	-.366	.144	-.280**
自立性尊重	.201	.112	.194*	-.300	.123	-.261**	.000	.157	.000
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	F20-1.67	1.004	-.214	-.052	1.106	-.006	-2.037	1.413	-.175
再就職型(非正規雇用)	-.672	.791	-.131	.366	.871	.064	-.859	1.113	-.113
専業主婦型	-.162	.846	-.029	.899	.931	.147	-.535	1.190	-.065
その他	-2.272	1.569	-.167	1.442	1.728	.095	-.614	2.208	-.030
(定数)	14.137	2.482		13.436	2.733		11.713	3.493	
調整済みR2		.129			.140			.222	
N=214									

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

## (2) 母親の支配的態度

親密度（母親の支配的態度）の低得点群の結果（表 14）について記述する。調整済み R2 乗値は「ライフスタイル志向」.061, 「向上心志向」.035, 「経済的自立志向」.189 であつ

た。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」が1%水準で有意であり、.285のプラスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」が5%水準で有意であり、.223のプラスの影響を与えていることが分かった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」が1%水準で有意であり、-.358のマイナスの影響を与えていることが分かった。また、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」は5%水準で有意であり、.197のプラスの影響を与えていることが分かった。さらに、「母親の養育態度（伝統的役割分業）」は10%水準で有意であり、-.179のマイナスの影響を与えていることが分かった。

親密度（母親の支配的態度）の高得点群の結果（表15）について記述する。調整済みR2乗値は「ライフスタイル志向」.025,「向上心志向」-.071,「経済的自立志向」.059であった。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」が1%水準で有意であり、.298のプラスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、有意な結果は見られなかった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」が5%水準で有意であり、.304のプラスの影響を与えていることが分かった。

表14 キャリア意識の規定要因（母親の支配的態度の低得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	.013	.115	.011	-.166	.115	-.144	-.270	.138	-.179*
経済的自立を含む参加	-.041	.130	-.031	.289	.129	.223**	.334	.156	.197**
家庭第一主義	.305	.103	.285***	-.055	.103	-.052	-.494	.124	-.358***
自立性尊重	.054	.104	.049	-.065	.104	-.060	.105	.125	.074
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	-1.677	.930	-.209*	1.007	.927	.128	-1.361	1.116	-.131
再就職型(非正規雇用)	-1.104	.748	-.203	.414	.746	.077	-.951	.898	-.135
専業主婦型	-1.026	.830	-.154	.847	.828	.130	-.262	.997	-.030
その他	-1.533	1.265	-.126	.502	1.261	.042	-.818	1.519	-.052
(定数)	14.149	2.521		13.849	2.513		16.425	3.026	
調整済みR2		.061			.035			.189	
N=214									
***p<1%,**p<5%,*p<10%									

表 15 キャリア意識の規定要因（母親の支配的態度の高得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	.008	.082	.013	.044	.114	.050	-.120	.133	-.111
経済的自立を含む参加	-.098	.125	-.100	.109	.172	.085	.491	.201	.304**
家庭第一主義	.267	.101	.298***	.032	.139	.027	-.186	.162	-.126
自立性尊重	.109	.096	.138	-.016	.132	-.015	-.142	.154	-.110
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	-.366	.794	-.056	-.867	1.095	-.102	-.869	1.279	-.082
再就職型(非正規雇用)	.172	.616	.039	-.306	.849	-.053	-.546	.992	-.075
専業主婦型	-.595	.691	-.126	.057	.953	.009	.899	1.113	.116
その他	-.139	1.192	-.013	-.433	1.644	-.031	.075	1.921	.004
(定数)	13.535	2.187		13.799	3.015		12.727	3.523	
調整済みR2		.025			-.071			.059	
N=214									

\*\*\*p<1%,\*\*p<5%,\*p<10%

### (3) 母親への服従的態度

親密度（母親の服従的態度）の低得点群の結果（表 16）について記述する。調整済み R2 乗値は「ライフスタイル志向」.044, 「向上心志向」-.035, 「経済的自立志向」.256 であった。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」が 1%水準で有意であり, .332 のプラスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」においては、「母親の養育態度（自立性尊重）」が 10%水準で有意であり, -.187 のマイナスの影響を与えていることが分かった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度（伝統的役割分業）」と「母親の養育態度（家庭第一主義）」が 1%水準で有意であった。「経済的自立志向」に対して, 前者は-.283, 後者は-.334 のマイナスの影響を与えていることが分かった。また, 「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」と「母親の職業経歴（正規雇用で再就職）ダミー」は 10%水準で有意であった。「経済的自立志向」に対して, 前者は.166 のプラスの影響, 後者は-.196 のマイナスの影響を与えていることが分かった。

親密度（母親の服従的態度）の高得点群の結果（表 17）について記述する。調整済み R2 乗値は「ライフスタイル志向」.115, 「向上心志向」.041, 「経済的自立志向」.040 であった。「ライフスタイル志向」において、「母親の養育態度（家庭第一主義）」と「母親の職業経歴（正規雇用で再就職）ダミー」は 1%水準で有意であった。「ライフスタイル志向」に対して, 前者は.386 のプラスの影響, 後者は-.353 のマイナスの影響を与えていることが分かった。また, 「母親の職業経歴（非正規雇用再就職）ダミー」は 10%水準で有意であり, -.254 のマイナスの影響を与えていることが分かった。「向上心志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」は 5%水準で有意であり, .335 のプラスの影響を与えていることが分かった。「経済的自立志向」において、「母親の養育態度（経済的自立を含む社会参加）」は 5%水準で有意であり, .274 のプラスの影響を与えていることが分かった。

また、「母親の養育態度（家庭第一主義）」は10%水準で有意であり、-.189のマイナスの影響を与えていることが分かった。

表 16 キャリア意識の規定要因（母親への服従的態度の低得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	-.014	.108	-.014	-.201	.125	-.173	-.390	.128	-.283***
経済的自立を含む参加	-.010	.140	-.008	.052	.162	.033	.307	.166	.166*
家庭第一主義	.353	.107	.332***	-.024	.125	-.020	-.479	.127	-.334***
自立性尊重	.122	.099	.121	-.214	.116	-.187*	-.143	.118	-.105
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	.007	.857	.001	-.184	.997	-.022	-.1903	1.018	-.196*
再就職型(非正規雇用)	-.009	.698	-.002	.401	.811	.066	-.1260	.829	-.175
専業主婦型	-1.131	.790	-.172	1.066	.919	.143	-.408	.939	-.046
その他	-.309	1.146	-.028	1.062	1.332	.085	-.674	1.361	-.046
(定数)	11.591	2.523		18.162	2.934		20.031	2.997	
調整済みR2	.044			-.003			.256		
N=214									
***p<1%,**p<5%,*p<10%									

表 17 キャリア意識の規定要因（母親への服従的態度の低得点群）

	ライフスタイル志向			向上心志向			経済的自立志向		
	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差	ベータ
母親の養育態度									
伝統的役割分業	-.090	.085	-.122	.122	.099	.150	.122	.140	.106
経済的自立を含む参加	-.042	.105	-.045	.350	.121	.335***	.407	.173	.274**
家庭第一主義	.337	.091	.386***	-.049	.105	-.051	-.260	.150	-.189*
自立性尊重	.088	.090	.102	.053	.104	.056	.087	.148	.064
母の職業経歴 (基準:就業継続型)									
再就職型(正規雇用)	-2.667	.896	-.353***	1.182	1.033	.141	.625	1.469	.053
再就職型(非正規雇用)	-1.129	.645	-.254*	.224	.744	.046	.717	1.058	.103
専業主婦型	-.760	.686	-.159	.405	.792	.076	1.642	1.126	.218
その他	-1.498	1.312	-.118	-.836	1.514	-.060	1.401	2.152	.070
(定数)	14.360	2.040		10.225	2.354		9.786	3.346	
調整済みR2	.115			.041			.040		
N=214									
***p<1%,**p<5%,*p<10%									

## 4 考察

### 4.1 度数分布

母親の職業経歴では、再就職（非正規雇用）型が最も多く、就業継続が最も少ない結果となった（図 2）。女性の労働力率は、結婚や出産期にあたる年代で低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇する、いわゆる M 字カーブを描くと言われている。内閣府（2017）が労働力調査をもとに作成した「女性の年齢階級別労働力率の推移」をみると、大学生の母親世代である昭和 51 年では、平成よりも極端な M 字カーブを描くことが分かっている。母親世代では結婚や出産期に退職し、子育てがひと段落したところで再就職することが主流という特徴が、本調査に回答した女子大学生の母親の職業経歴とも当てはまっているといえるだろう。

「現実的に想定するライフコース」と「理想とするライフコース」の結果（図 3, 4）について考察する。結婚・子どもを持つことにおいて、肯定的な回答が多く、理想とする場合の方が結婚・子どもを望む回答が多いことが分かった。就業形態においては、現実的な想定と理想の両方において、「就業継続」を望む人が多いことが分かった。松並・西尾（2018）が女子大学生に行った調査の中でも、「結婚・子ども有、就業継続」のキャリアプランを選択する割合が多く、同様の結果が見られた。またマイナビ（2020）が 2021 年卒の大学生・大学院生を対象に行った調査の中でも、結婚後の仕事について「共働きが望ましい」と回答する割合が過去最高だった。就業継続を希望するという特徴が、本調査に回答した女子大学生にもみられたといえるだろう。

### 4.2 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因

#### (1) ライフコース観

まず「現実的に想定するライフコース」と「理想とするライフコース」を従属変数にした重回帰分析の結果（表 5~表 10）を元に、以下で考察を述べる。

「再就職（正規雇用）」を現実的に想定すると理想とするにおいて、調整済み R2 乗がマイナスの値になったことについて検討する。「再就職（正規雇用）を現実的に想定する」を従属変数として重回帰分析を行った際に、「母親の養育態度（家庭第一主義）」のみ有意差が見られた。そこでこの 2 つの変数を入れて、相関分析を行った（表 18）。この結果から、「母親の養育態度（家庭第一主義）」の得点が高いほど、「就業継続を現実的に想定する」の得点が高くなることがいえる。「再就職（正規雇用）を理想とする」において、相関分析で有意な結果は見られなかった。今回設定した独立変数は「再就職（正規雇用）を理想とする」に関して、影響を与えるものがなかったといえる。

表 18 再就職（正規雇用）を現実的に想定することの規定要因

		再就職 (正規雇用)
母親の養育態度	家庭第一主義	Pearsonの 相関係数
		0.134*
		度数
		214
*** p < 1%, ** p < 5%, * p < 10%		

仮説と当てはまる結果になったものについて検討する。母親の家庭優先的な態度を認知する娘は、「結婚すること」、「子供を持つこと」、「専業主婦」、「再就職（非正規雇用）」は現実的に想定する・理想とする傾向にある。上記の結果から、家庭第一主義な母親の態度が、「専業主婦」、「再就職（非正規雇用）」など家庭志向なライフコース選択に影響を与えるということが読み取れる。伊藤（1995）が述べたように、母が「家庭第一主義」に否定的なほど娘は職業志向に、肯定的なほど家庭志向に傾くと言われていると同様の結果が示されたといえる。また、経済的自立を促す母親の態度を認知する娘は、「再就職（非正規雇用）」を現実的に想定しない傾向にある。この結果においても、伊藤（1995）が述べたように母親が経済的自立を含む参加に肯定的なほど、娘は職業志向よりのライフコースを選択するという結果と当てはまっていることがいえる。以上の結果から、母親の養育態度は女子大学生のライフコース観に影響を与えていることが一部確認できたと思われる。

一方、仮説とは異なる結果になったものについても記述する。自立性を尊重する母親の態度を認知する娘は、「就業継続」を現実的に想定しない傾向にあることが分かった（表7）。伊藤（1995）の調査では、娘の職業志向が大きくなる要因として、「自立性尊重」が見られたが、異なる結果となった。また、家庭優先的な態度を認知する娘は、再就職（正規雇用）現実的に想定する傾向がある（表9）。この点に関しても、伊藤（1995）が述べた、母が「家庭第一主義」に肯定的なほど家庭志向に傾くと異なる結果が見られた。この2点について、本調査では十分な結果が示されなかった。

母親の職業経歴と娘のライフコース観との関連について記述する。母親の職業経歴（その他）ダミーは、一貫した回答ではないため検討の対象からは除外する。就業継続型の母親を持つ人に比べて、専業主婦型の母親を持つ人の方が、子どもを持つことを現実的に想定せず、理想としない傾向にあることが分かった。このような結果になった要因として、子ども時代に母と娘が長時間接する中で何かマイナスの影響をもたらされたのではないかと考えられる。佐藤淑子（2012）が乳幼児をもつ父母を対象に調査を行った結果、専業主婦の母親はフルタイム職の母親に比べて「子育てへの否定感」が高いことが示された。これらを踏まえて、母親が専業主婦で長時間生活を共にする中で、幼少期の母親の子育てに良いイメージを持ってないがゆえに、娘自身が「子供を持つこと」に否定的になるのではないかと考えられる。また、就業継続型の母親を持つ人に比べて、再就職（正規雇用）型の母親を持つ人の方が、「専業主婦」を現実的に想定する傾向にあることが分かった。上記の結果になった理由としては、就業継続型の母親を持つ子どもより、再就職（非正規雇用）型の母親を持つ子どもの方が、これまでの生活とのギャップから母親の就業に対してマイナスのイメージを抱きやすいことが考えられる。三輪・青山（2014）の調査からも、専業主婦の母親を持つ子どもに

比べて、フルタイムで働く母親を持つ子どもの方が職業生活と私生活の充足イメージが低いことが明らかになった。

本調査において母親の職業経歴と娘のライフコース志向との関連を分析した結果、村松（1994）が述べた、母親が家庭志向のライフコースであれば、娘も家庭志向のライフコースを理想とする傾向は見られなかった。これは母親のライフコースは再就職型（非正規雇用）と専業主婦型が多数を占めるが（図2）、女子大学生は就業継続を望む人が多い（図3、図4）ように以前に比べ女性の社会進出が進んでいることが要因だと考えられる。

## （2） キャリア意識

次に「キャリア意識」を従属変数にした重回帰分析の結果（表11）を元に、以下で考察を述べる。まず、仮説が当てはまった点について示す。母親の家庭優先的な態度を認知する娘は、ライフスタイル志向性を高め、経済的自立志向性を低める傾向にあることが分かった。母親の伝統的役割分業態度を認知する娘は、経済的自立志向性を低める傾向があることが示された。この結果から、女性は家庭を第一に考えるべきという母親の態度は、娘の家庭志向性を高め、職業志向性を低める結果になったといえる。さらに、母親の経済的自立を促す態度を認知する娘は、向上心志向性と経済的自立志向性を高める傾向にあることが明らかになった。この結果から、女性も仕事をすべきという母親の態度は、娘の職業志向性を高める結果になったといえる。伊藤（1995）の調査で見出した、母の「伝統的役割分業」や「家庭第一主義」の態度を認知しているほど、娘は家庭志向に傾き、母の「経済的自立を含む参加」を認知しているほど、職業志向に傾くと同様の結果が見られた。一方で、伊藤（1995）の調査による職業志向的な娘ほど母親は自立性を尊重していると認知している結果は見られなかった。以上のことから、母親の養育態度は女子大学生のライフコース観に影響を与えていることが一部確認できたと思われる。

## （3） 女子大学生のライフコース観・キャリア意識の規定要因まとめ

本節では、「母親の態度と親子の関係性が、娘のライフコース観・キャリア意識に影響を与えるか」を検討した。分析の結果、性役割意識が強い母親を持つ娘は、家庭志向なライフコースを選択することやキャリア意識を持つことに影響を与えることが明らかになった。また、経済的自立を促す母親を持つ娘は、職業志向なライフコースを選択することやキャリア意識を持つ傾向にあることが分かった。伊藤（1995）の研究とも同様の結果が見られたといえる。一方、自立性を尊重する母親の態度は、娘が職業志向なライフコースを選択することやキャリア意識を持つことに影響及ぼさなかった。この点については、検討が必要である。

親のライフコースが子供のライフコース観の形成に影響を与えるかについてまとめる。分析の結果、就業継続型の母親を持つ人に比べて、再就職（正規雇用）型の母親を持つ人の方が、「専業主婦」を現実的に想定する傾向にあることが示された。村松（1994）が述べた、母親が家庭志向のライフコースであれば、娘も家庭志向のライフコースを理想とする傾向は見られなかった。この原因としては、時代の変化が考えられる。本調査において、母親世代では再就職（非正規型）型が多かったが、女子大学生は就業継続を現実的に想定し、理想とする人が多かった。このように母親世代と娘世代では、ライフコース観に変化が見られる。

そのため、女性大学生のライフコース観は母親の影響よりも、社会の変化など別の要因が影響していると考えられる。この点については、今後検討する必要がある。

### 4.3 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較

#### (1) 母親への肯定的感情

母親への肯定的感情の低得点群（表 12）において、「向上心志向」の調整済み R2 がマイナスの値になったことから、母親に対してマイナスな感情を持つ娘の「向上心志向」に関しては、今回設定した独立変数の影響がないといえる。

母親への肯定的感情の低得点群・高得点群ともに、母親の家庭第一主義な態度を認知する娘は、ライフスタイル志向性が高く、経済的自立志向性が低くなる傾向がある。この点に関しては、母親に対する気持ちの高低差は影響を与えなかった。

仮説と同様に母親への肯定的感情の高得点群のみで、有意な結果が見られた点について記述する。経済的自立を促す母親の態度を認知する娘は、向上心志向性と経済的自立志向性を高める傾向にある。このように母親に対してポジティブな感情を抱いている人ほど、職業志向的な母親の態度が娘の職業志向性を促すという結果が見られた。若原（2003）の調査の中でも、親への愛しているほど、親の態度と自分を同一視しようとする傾向にあるという結果と同様の結果が見られたといえる。また、水本（2018）も同様に、親の価値観の捉われは、母娘密着型で最も高いと述べている。一方で、母親へ肯定的な感情の高得点群の場合、自立性を尊重する母親の態度を認知する娘は、ライフスタイル志向性を高め、向上心志向を低める傾向があるという結果については検討が必要である。

#### (2) 母親の支配的態度

母親の支配的態度の高得点群（表 15）において、「向上心志向」の調整済み R2 がマイナスの値になったことから、母親の支配的な態度を認知する娘の「向上心志向」に関しては、今回設定した独立変数の影響を受けないといえる。母親の支配的態度の低得点群・高得点群ともに、母親の家庭第一主義的な態度を認知する娘は、ライフスタイル志向性を高める傾向にある。また、母親の経済的自立を促す態度を認知する娘は、経済的自立志向性を高くなることが分かった。仮説とは矛盾し、母親の支配的態度の得点が低い場合に、母親の影響を受けるといえる結果が複数見られた。1つ目は、「母親の養育態度（経済的自立を含む参加）」は娘の「向上心志向」を高める効果があることである。2つ目は、「母親の養育態度（伝統的役割分業）」は娘の「経済的自立志向」を低める効果があることである。水本（2018）が述べた、母娘関係が密着であるほど、親の価値観への捉われが大きくなるという知見とは異なる結果となった。

#### (3) 母親への服従的態度

母親への服従的態度の低得点群（表 16）の「向上心志向」において、「母親の養育態度（自立性尊重）」有意であったが、調整済み R2 乗値がマイナスになった点について検討する。そこで有意であった「母親の養育態度（自立性尊重）」と「キャリア意識（向上心志向）」の相関分析を行った。その結果、「母親の養育態度（自立性尊重）」と「キャリア意識（向上心志向）」に相関は見られなかった。母親への服従的態度の低得点群の娘の「向上心志向」にお

いて、今回設定した独立変数は影響を与えないといえる。

母親への服従的態度の低得点群・高得点群ともに、母親の家庭第一主義な態度を認知している娘は、ライフスタイル志向性を高め、経済的自立志向性を低める傾向にある。また、母親の経済的自立を促す態度を認知する娘は、経済的自立志向性が高くなることが分かった。この点に関しては、娘が母親の服従的かどうかは影響しなかった。母親への服従的態度の高得点群のみで有意な結果が見られたものがあった。それは、母親の経済的自立を促す態度を認知する娘は、向上心志向性が高くなるという結果である。ここから、母親の言うことに従おうとする娘ほど、職業志向な母親の態度が娘の職業志向性に影響を与えるといえる。一方で、母親への服従的態度の低所得点群では、母親の伝統的役割分業的な態度を認知する娘は、経済的自立志向性が低くなる仮説と矛盾する結果が見られた。上記の結果から、水本(2008)が述べた母娘関係が密着であるほど、親の価値観への捉われが大きくなるという結果は、一部見られたが大き関係しているとは言い難い結果となった。

母親への服従的態度では、他の2つの下位概念の中ではあまり見られなかった母親の職業経歴による影響が示された。母親への服従的態度の低得点群では、就業継続型の母親を持つ人に比べ、再就職(正規雇用)型の母親を持つ人の方が、経済的自立志向性を低める結果となった。母親への服従的態度の高得点群では、就業継続型の母親を持つ人に比べ、再就職(正規雇用)型と再就職(非正規雇用)型の母親を持つ人の方が、ライフスタイル志向性を低めることが分かった。

#### (4) 母娘親密度の低得点群と高得点群の比較まとめ

本節では、「母娘の距離が親密的であるほど、親の態度が女子大学生のキャリア意識に影響を及ぼすか」という仮説を検討した。その結果、「母親の肯定的感情」と「母親への服従的態度」において、それらが高いほど親の態度が娘のキャリア意識に影響を与えやすいという結果が一部確認できた。一方、「母親の支配的態度」においては、その高さによって母親の態度が娘のキャリア意識に影響を及ぼすという結果は見られなかった。本調査では、母親へのポジティブな感情と母親に従おうとする姿勢が、娘の母親の価値観の捉われに影響するということが明らかになった。そして、水本(2018)が述べた、母娘関係が密着であるほど、親の価値観への捉われが大きくなるとは、異なる結果が見られた原因について考えた。水本(2018)は、「親との信頼関係」と「親への親密性」を2軸とし、その高低から親子関係を4類型に分類している。本調査では3つの下位概念をそれぞれ別に扱っているため、正しく母娘の関係を把握できなかったと考えられる。母子関係を自立型、依存型、疎遠型など複数の類型化を行えば、また別の結果が示されると思われる。

## 5 結論

本稿では、女子大学生を対象に調査を行い、SPSSの分析をもとに以下の2点について主に検討してきた。1点目は、「母親の態度や親子の関係性が、女子大学生のライフコース観・キャリア意識に影響を与えるか」について検討した。重回帰分析の結果、性役割意識が強い

母親を持つ娘は、家庭志向なライフコースを選択することやキャリア意識を持つことに影響を与えることが明らかになった。また、経済的自立を促す母親を持つ娘は、職業志向なライフコースを選択することやキャリア意識を持つ傾向にあることが示された。しかし、自立性を尊重する母親の態度は、職業志向なライフコースを選択することを低める効果があった。一部予想とは異なる結果が見られたが、母親の養育態度が娘のライフコース観やキャリア意識に影響を与えるという結果が一部確認できたといえる。2点目は、「母娘の距離が親密的であるほど、親の態度が女子大学生のキャリア意識に影響を及ぼすか」について検討した。そこで「親密度」の3つの下位概念を低得点群・高得点群に分類し、重回帰分析を行った。その結果、「母親の肯定的感情」と「母親の服従的態度」が高いほど、母親の態度が娘のキャリア意識に影響を及ぼしやすくなる傾向が一部確認できた。特に、母親に対してポジティブな感情を持っている人の方が、その傾向が顕著に見られた。しかし、「母親の支配的態度」の得点が高いほど、娘は親の態度の影響を受けやすくなるという結果は見られなかった。以上のことから母と娘の親密度においては、母に対する肯定的な感情や娘の母に対する服従的な姿勢が、娘のキャリア意識に影響を与えるということが一部確認できたといえる。

本研究の不十分であった点について、2点挙げる。1点目は、母親の養育態度を娘の認識レベルでしか測定できていないところである。娘が母親の態度を正確に認識しているとは言いきれないため、娘が答えた回答と実際の母親の態度にズレが生じた可能性があると考えられる。そのため女子大学生とその母親の両方に調査を行った場合、本研究とは異なる結果がみられるかもしれない。2点目は、今回設定した母と娘の親密度項目が網羅的に母娘の関係性を捉えられていない点である。この点についても母と娘の両方からの回答を得ることで、母娘関係をより細かく類型化した方が有意な結果が得られたのではないかと考える。以上を今後の展望とする。

## 謝辞

最後になりましたが、ご指導いただいた立木茂雄教授、TAの川見さん、そして本論執筆にあたって調査にご協力くださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- ベネッセ教育総合研究所, 2016, 「第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 2016年」ベネッセ教育総合研究所ホームページ, (2020年12月9日取得, [https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/000\\_daigakusei\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/000_daigakusei_all.pdf)).
- 藤原あやの・伊藤裕子, 2007, 「青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係」『青年心理学研究』19:69-82.
- 藤原善美, 2009, 「青年のジェンダー・アイデンティティとライフコース展望における自律性の関連性の検討——大学生の調査データの分析」『キャリア学研究』28:19-26.
- 星野冴香・寺田盛紀, 2012, 「就職活動における満足度と親のかかわり方の関連——名古屋地区の女子大生に対するアンケート調査結果から」『職業とキャリアの教育学』19:1-13.
- 石黒格, 1998, 「対人環境としてのソーシャル・ネットワークが性役割に関する態度と意見分布の認知に与える影響」『社会心理学研究』13(2):112-121.
- 伊藤祐子, 1995, 「女子青年の職歴選択と父母の養育態度——親への評価を媒介として」『青年心理学研究』7:15-29.
- , 1997, 「高校生における性差観の形成環境と性役割選択——性差観スケール(SGC)作成の試み」『教育心理学研究』45:396-404.
- 小高恵, 2008, 「青年の親への態度についての発達的变化——心理的離乳過程のモデルの提案」『太成学院大学紀要』10(0):31-48.
- 厚生労働省, 2019, 「女性活躍推進法特集ページ(えるぼし認定)」, 厚生労働省ホームページ, (2020年12月9日取得, <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000091025.html>).
- 日下部典子, 2009, 「母親の就労状況と親の育児行動が大学生の育児観に及ぼす影響」『福山大学人間文化学部紀要』9:99-107.
- マイナビ, 2020, 「2020年卒大学生のライフスタイル調査」, 新卒採用サポネット(2020年12月8日取得, <https://saponet.mynavi.jp/release/student/life/mynavilifestyle2021/>).
- 松並知子・西尾亜希子, 2018, 「女子大学生のキャリアプランの選択の規定要因——稼得意識, 進路選択に対する自己効力, 自尊感情, 職業観」『女性学評論』32:25-52.
- 三輪哲・青山祐季, 2014, 「子どもの意識に対する母親の働き方の影響の再検討」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』62:19-36.
- 水本深喜・山根律子, 2010, 「青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味——精神的自立・精神的適応との関連性から」『発達心理学研究』21(3):254-265.
- 水本深喜, 2016, 「母親への親密性が青年期後期の精神自立に与える影響——母親への親密性尺度による検討」『青年心理学研究』27:103-118.
- , 2018, 「青年期後期の子と親の関係——精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差」『教育心理学研究』66:111-126.
- 村松幹子, 1994, 「女子学生のライフコース観の形成——親の影響を中心に」『年報社会学論集』7:85-96.

- 内閣府大臣官房政府広報室，2019，『男女共同参画に関する世論調査』。
- 内閣府男女共同参画局，2017，『男女共同参画白書 平成29年版』。
- 内閣府男女共同参画局，2020，『「共同参画」2020年3・4月号』。
- 小川一夫・田中宏二，1980，「親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究」『発達心理学研究』28：64-67。
- 佐々木尚之，2012，「JGSS 累積データ 2000-2010 にみる日本人の性別役割分業意識——Age-Period-Cohort Analysis の適用」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究文集』12：69-80。
- 佐藤淑子，2012，「父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動」『鎌倉女子大学紀要』19：25-35。
- 鹿内啓子，2005，「大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因」『北星学園大学文学部北星論集』42（2）：69-88。
- ，2007，「大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性」『北星学園大学文学部北星論集』44（2）：1-11。
- 立木茂雄，2015，『家族システムの理論的・実証的研究〔増補改訂版〕——オルソンの円環モデルの妥当性の検討』萌書房。
- 立木茂雄，2020，「Welcome to FACEKG Page」，立木茂雄研究室，（取得日：2020年12月3日取得，<https://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/FACESKG/FACESindex.html>）。
- 田澤実・梅崎修，2016，「保護者のかかわりと大学生のキャリア意識——保護者の就職活動への関心度と，学際の満足度に注目して」『キャリア学研究』35：21-27。
- 手塚紀子・古屋健，2017，「女子大学生のライフコース選択に及ぼす家族の影響についての研究」『立正大学心理学研究年報』8：71-88。
- 若原まどか，2003，「青年が認識する親への愛情や尊敬と，同一視および充実感との関連」『発達心理学研究』14（1）：39-50。
- 吉村英，2014，「女子大学生のキャリア意識と幸福感——学部間の比較」京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要発達教育学研究』8：31-53。